

闘病記を読む—薬学導入教育としての展開

土屋明美 與那正栄 渡辺謹三 成井浩二 加藤哲太 横松 力

はじめに

東京薬科大学薬学部は1年生を対象とする薬学導入教育を三部構成により通年で行っている。前期には薬学全般に関してオムニバス方式による講義を受講し(薬学入門)、並行して病院や施設の見学実習を行い小グループによるポスター作成を行い(薬学入門演習Ⅰ)、薬学を概観する。後期には他者への思いやりを育み、医療人としての自覚を高めることを目的として「薬学入門演習Ⅱ」を体験する。前期は知識・情報により薬学の全体像を把握し、後期は体験学習により医療人としての自覚を高めることに主眼が置かれている。

I. 目的・方法

1年生後期に開講する薬学入門演習Ⅱでは、介助1(車いす)、介助2(高齢者体験)、救急救命等の体験学習の最後に総まとめとして Small Group Discussion (以下SGDと略す)を行っており、平成20,21年度はSGDの題材として「闘病記」を活用しての展開を試みた。ここでは闘病記読書傾向などを報告し、薬学教育6年間を通して学習されるヒューマニズム教育内容充実の手がかりを得る一助としたい。

方法: SGD終了後に闘病記/SGD体験について無記名によるアンケートを行い分析し、学生の選択した図書を疾患別に分類・調査した。

研究協力者: 薬学部1年生 東京薬科大学情報センター

II 闘病記を読むにあたって

1. 患者の語りに耳を傾ける

患者にとって闘病記は患者の視点からの情報提供の書であり、自分のかかっている病気がこの先どうなるかという参考になるものである¹⁾。一方、医療者にとっては、Evidence Based Medicine(科学的根拠に基づく医療)からは得られない情報を得る機会となり、患者の視点からの Narrative Based Medicine(患者の語りに根ざした医療)への関心を高めることにつながる。医療者は、一人ひとりの患者に固有に体験される主観的な病 illnessの体験に耳を傾け、患者の生活背景や心理的状况を理解したうえで患者が求めていることを鋭敏に察知して関わる事が求められている。薬剤師と患者の関係に置き換えてみると、患者は処方された薬剤に、希望やあきらめ、救い、無力感・・・など、患者自身の生活背景や生き方などを含めて様々な思いをそこに映し出すであろう。患者が薬剤師に求めるのは一方的なクールな情報ではなく、患者に内在する生きる力を存分に発揮できるようになる温かい情報提供、服薬支援なのではなかろうか。この意味において、薬学生が患者や患者家族の手記・闘病記を読むことは、病との多様な付き合い方を知り、生活者としての患者の生の声に触れる絶好の機会になると同時に、薬学コアカリキュラムの「ヒューマニズムについて学ぶ」関連の学習テーマにも通じるものとなる。

2. 演習への導入

闘病記を読むことについて、学生へは次のように導入した。<ポートフォリオより>

—闘病記を読む— 患者として入院したり、治療を受けた経験のある人は、医療者の態度や言葉で患者が勇

気づけられたり或いは逆に不安になったりすることがあるということを体験していると思います。「病気になる」とは、患者として「治療を受ける」とは、突然に「がんを告知される」とは、毎日毎日「服薬する」とはどういうことなのか、患者の声に耳を傾けてみましょう。そして患者の体験から学んだことをまとめて、これからの学問に役立てていってください。(情報センターの「闘病記ライブラリー」を訪ねてください。また、公立の図書館では、ノンフィクション、ルポルタージュなどの中に闘病記を見つけることができます)

3. 闘病記レポートの作成

闘病記の読書は個別学習として夏休み明けの提出を求めた。図書の選択は個人に任せ、レポートの構成は次のように項目を立てて記述することとした。

○書名、出版社、発行年、情報センターによる疾病分類表に基づいた番号を記載する。

○本文は次のように3部構成で記述する。

1) 本書を選んだ理由 2) 本書の概要 (疾病も記載する) 3) 感想・薬学生として学んだこと; 例えば印象に残った言葉・考え方・生き方、自分の体験と重ねて考えられること、将来の薬剤師として考えたこと、人間として学んだこと、など。 学生にはコピーをしてSGDの際に持参するように指示した。

4. 闘病記リソースの提供

本学情報センターの闘病記ライブラリーには、2010年1月現在620冊が、次のように疾患別に分類されて配架されている。①がんⅠ一般(肺、肝臓、腎臓、膀胱、その他のがん) ②がんⅡ消化器 ③がんⅢ女性 ④脳の病気 ⑤神経の病気 ⑥心の病気 ⑦骨・筋肉の病気 ⑧血液の病気 ⑨皮膚の病気 ⑩小児の病気 ⑪男性の病気 ⑫その他の病気 ⑬心身障害者 ⑭医療倫理・患者心理 ⑮看護・介護・ホスピス。⑯医学的人生訓 ⑰その他 (闘病記の定義は「病と闘ったプロセスを綴った手記」¹⁾に準拠するが、⑭～⑰も含めて配架している)

闘病記を学習に活用する方法としては、共通の本を数人で読み討議して深める方法や、疾病について十分に調べ読み課題を見出すなど、その目的により多様に展開可能である。本演習では病者の語りに耳を傾けることを第一の目的として図書の選択は学生に任せた。

III 闘病記を用いたSGDの展開

本演習(SGD)は3時限連続(70分×3)で実施した。まず、導入として障がい、障がい者の心理などについてのミニレクチャーを行い、続いてSGDからポスタープレゼンテーションまでを次の手順により進めた。

1. SGDへの準備(読んだ本が異なる者同士6,7人で1グループを作り、向かいあって着席する)

①本から受けた印象をB7判の紙に描く(描画その1) ②本の紹介を順番に一人ずつ行う。③SGDの役割分担をする(司会と書記) ④各グループでSGDのテーマを決める(闘病記から感じたこと・考えたことや問題点について出し合い、そこから見出された共通点や類似点をグループのテーマとする。)

2. SGDからプレゼンテーションへ。

①テーマに関連することについて各人が読んだ闘病記ではどのようなことが表現されているかを明らかにし、自分たちの考えや医療従事者・薬剤師として考えることなどについて討議する。 ②本の印象を再度絵に描く(描画その2。イメージがSGDにより変わっても変わらなくても描く) ③プレゼンテーション用ポスター作成(2枚の絵も貼る)

④質疑応答も含めて1グループ10分程度、全員で発表する。 ⑤自己評価 (アンケート)

IV アンケートの構成

闘病記/SGD アンケート

(今後の参考にするためであり評価とは一切関係ありません。まとめて公表予定です)

- あなたは今回読んだ本をどこで入手しましたか？
①情報センター②地域の図書館 ③持っていた ④自宅にあった ⑤書店で購入 ⑥友人から借りた その他
- 今まで闘病記や医療に関連するノンフィクションの書物を読んだことはありますか？
ある ない
- ある と答えた方は 何冊ぐらい読みましたか？
() 冊
- 闘病記/SGD 体験について
 - ①医療への関心 (大いに高まった かなり高まった 高まった 変わらない)
 - ②医療人の自覚 (大いに高まった かなり高まった 高まった 変わらない)
 - ③患者心理の理解 (大いに深まった かなり深まった 深まった 変わらない)
 - ④疾患について (詳しく調べた 少し調べた 調べない 調べることを考えなかった)
 - ⑤SGD への参加 (大いに積極的 かなり積極的 通常通り 消極的)
 - ⑥他の班のプレゼンテーションは
(大いに参考になった かなり参考になった 参考になった 特にない)
- 今後、読みたい闘病記はどういうものですか？ (どういう人の、どういう疾患) その他。 意見・感想

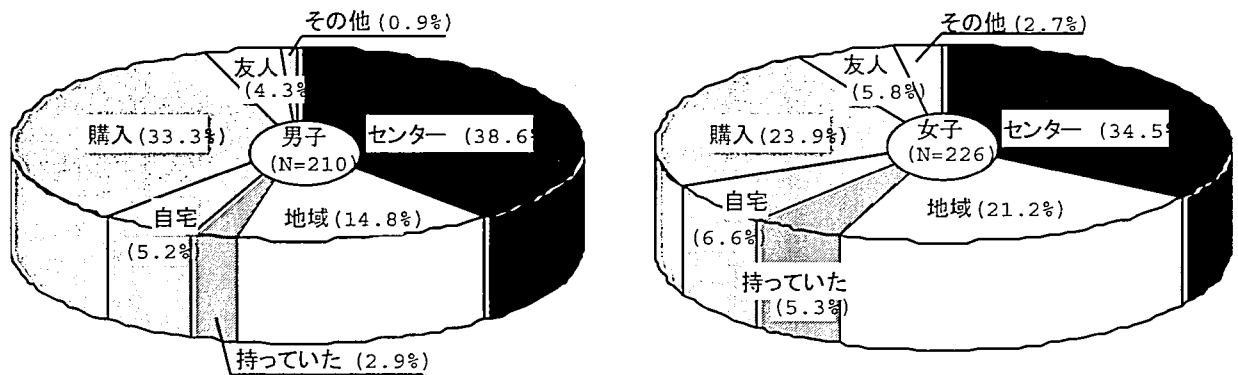
V 結果と考察

1. アンケートより

回答総数 436名 (男子 210名、女子 226名)

(1) 入手経路について

情報センターと地域の図書館から借りた学生が過半数 (男子 53.4%、女子 55.7%) を占めている。新しく購入したのは、男子 33.3%、女子 23.9%である。<図-1>

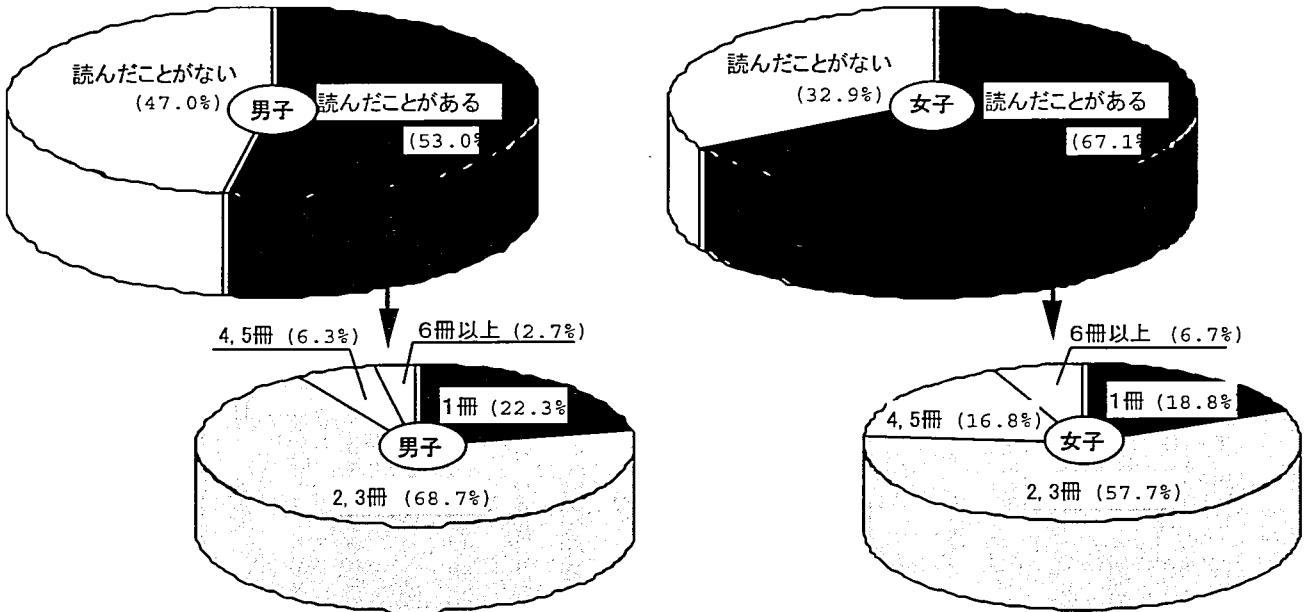


<図-1 闘病記入手経路>

(2) 闘病記の読書経験・冊数について

男子の 53.0%、女子の 67.1%は読書経験がある。読書経験のある学生に冊数を問うたところ 2,3冊が男子 68.7%、女子 57.7%と最も多い。4,5冊と6冊以上を合計すると、男子は 9.0%であるのに比して、女子は 23.5%と高い割合を占めている<次頁図-2>。医療に関連するノンフィクションは健康志向の高まり、自費出版ブームもあり近年多々出版されており、半数の学生は演習以前からそれらを手にしており、特に女子にその傾向が高く認められた。女子では4冊以上読書している学生が36人(女子の16%)いた。闘病記のジャンルは先に述べたように広く、疾病別に読み進んだり、家族が書いたもの或いは患者本人によるものを分けて読んだり、年齢層別、専門家・有名人

による著作など、選択の幅が広く読書へのモチベーションを高めていると推察される。

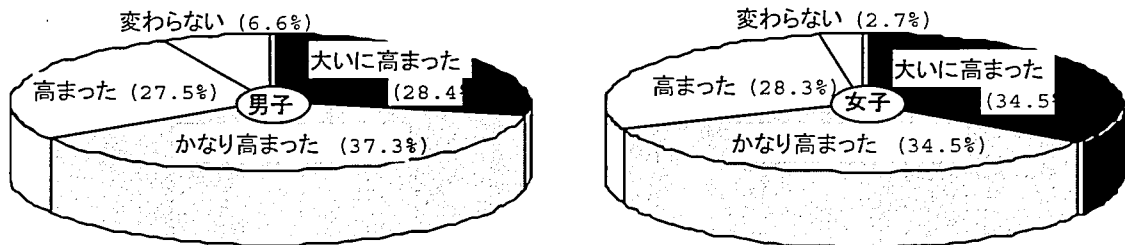


<図-2 読書体験>

(3) 闘病記/SGD 体験について

アンケートは4件法で施行したが本報告では便宜上、最初の二項目をまとめて「とても高まった」として考察する。

①医療への関心については、1大いに高まった、と2かなり高まった、を合計したものを「とても高まった」とする。それによると、3分の2以上の学生（男子65.7%、女子69%）が医療への関心を高めている。闘病記は患者の視点からの体験であり、必ずしも医療人との関わりが表現されているわけではなく、また医療人の言動により傷ついた体験なども表現されている。学生は患者の視点からの病との付き合い方や病に伴う人間関係の変化などを知ると同時に「疾病」そのものへの関心も持ち始めていることが読み取れる。<図3-①>

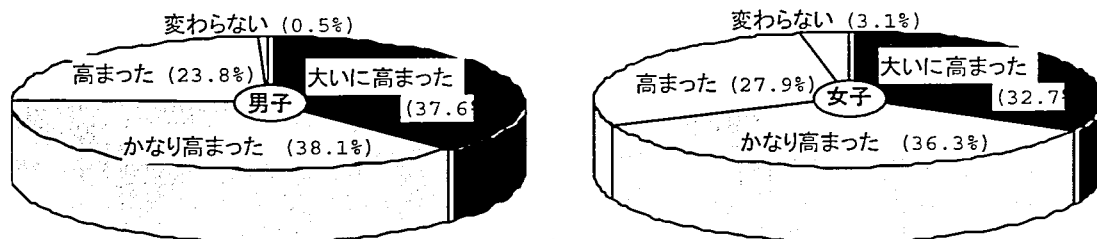


<図3-①関心>

②医療人の自覚では、男子75.7%、女子69%が「とても高まった」している。

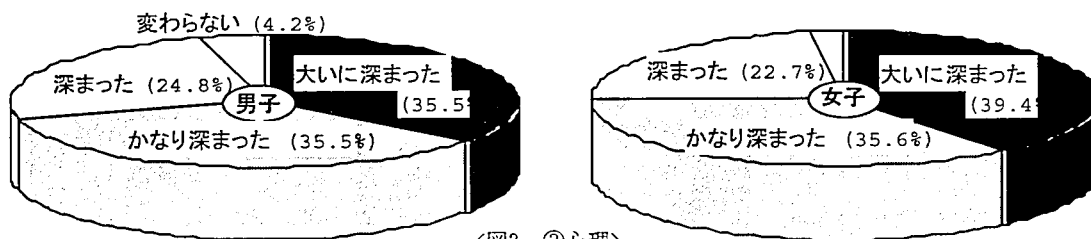
闘病記を、患者による病との付き合い方の書として読むだけでなく、自己の職業的アンデシティ形成の一助として、薬剤師として将来患者と関わる自分をイメージしようとしている。SGDにおいても、薬剤師はどのように関わるのが可能か、などが熱心に討議されている。<図3-②>

闘病記を読む－薬学導入教育としての展開



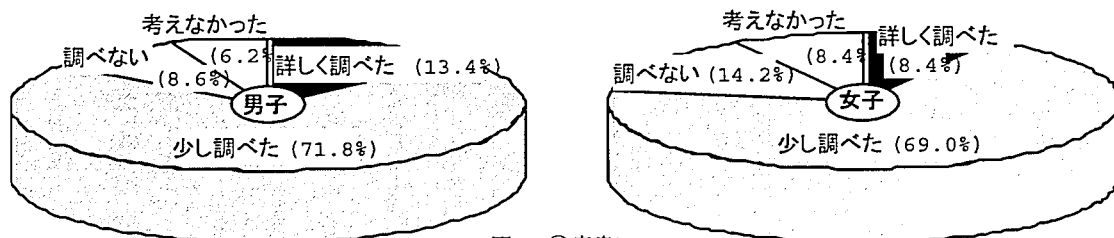
〈図3-② 自覚〉

③患者心理の理解では、男子71%、女子75%が「とても理解が深まった」としている。自分の読んだ闘病記だけではなく仲間の読んだ本の内容もSGDで知ることができ、患者個々人の生活背景の違いなどもありながら患者にならざるを得ない状況への共感的理解が広がっていった。SGDでは患者をとりまく家族・友人・医療者の存在への関心も深まっている。〈図3-③〉



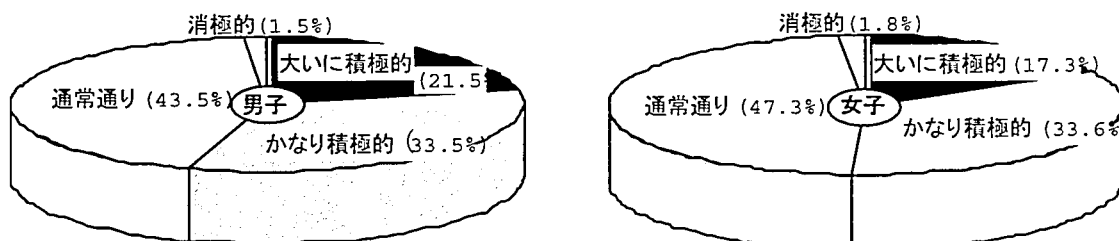
〈図3-③ 心理〉

④疾患について調べたかどうか、では男女とも4分の3以上(男子85.2%、女子77.4%)が調べている。疾患について調べることを課題にはしていなかったが、男女ともに高率で調べており将来の医療人としての心意気を見て取ることが出来る。〈図3-④〉



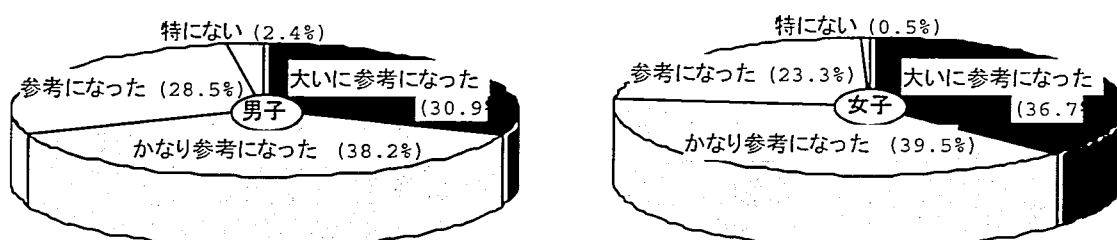
〈図3-④ 疾患〉

⑤SGDへの参加については、男女とも「とても積極的」と「通常通り」が各々半数を占めている。自分たちでテーマを見いだして始めるという、入学してからのSGDにはない新しい方法のSGDに積極的にかかわっている。〈図3-⑤〉



〈図3-⑤ 参加〉

⑥他の班のプレゼンテーションについて問うと、「とても参考になった」は男子 69.1%、女子 76.2%である。短時間でのポスター作成と全員参加の発表の仕方などが参考になったと思われる。仲間の良い点を積極的に取り入れて向上していく姿勢を育てることは、6年間の学生生活のなかで友人を蹴落として競争的にあるのではなく、ともに6年間を学ぶ態度を育てることにつながっていくことが期待される。〈図3-⑥〉



〈図3- ⑥参考〉

2. 闘病記の選択傾向

(1) 情報センター利用状況 2009.4.1~11.30

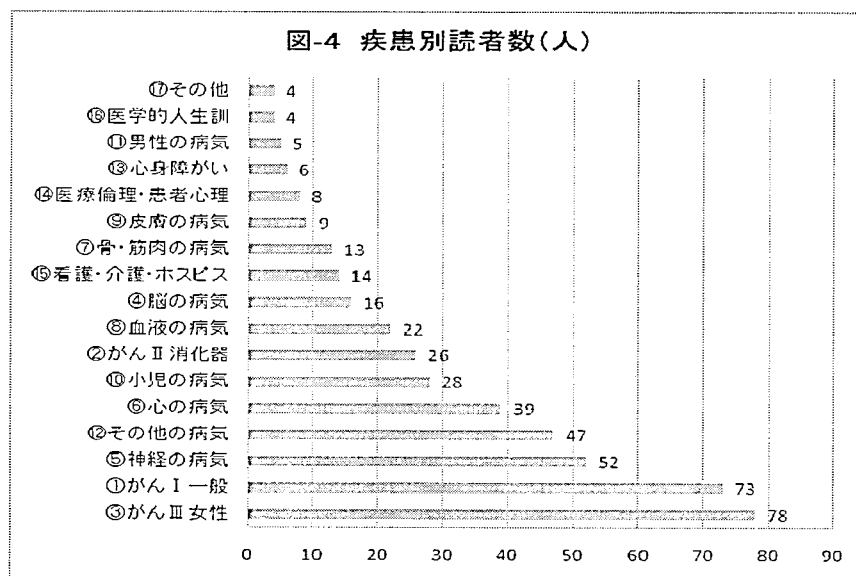
闘病記ライブラリー全 620 冊中 延 320 冊が閲覧されている。(但し、全利用状況であり 1 年生以外の利用も含まれる)。利用頻度からみると：6 回 おかあさんががんになっちゃった (藤原すず)、余命 1ヶ月の花嫁 (TBS イング 5)。4 回 1 リットルの涙 (木藤亜矢)、がん告知以後 (季羽倭文子)、「電池がきれるまで」の仲間たち (宮本雅史)。3 回が 8 冊

(2) 図書選択傾向 総数 444 人 (男子 212 人、女子 232 人)

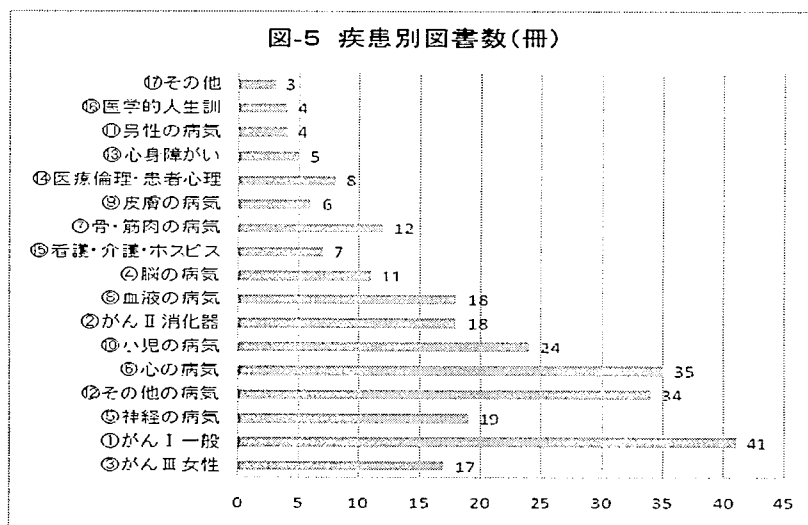
1) 読書数別ランキング

読者数の多い図書としては；余命 1 カ月の花嫁：57 人、1 リットルの涙：33 人、ガンに生かされて (飯島夏樹)、明日もまた生きていこう (横山有美佳)：各 11 人、が挙げられた。どれもマスメディアで取り上げられ、若い著者による手記でもあり共感を誘う本である。

2) 疾患別読者数 <図-4 >



3) 疾患別図書数 図書総数は 266 冊にわたった。図 4 の項目順に配列すると下図のようになる。〈図-5〉



③は「余命 1 カ月の花嫁」の読者が 57 人を占めているため、図書数としては少ない。①には新刊本「がんと闘った科学者の記録 (戸塚洋二)」を 5 名が読む。⑥心の病気では、うつ病関連の図書数が多い。

3. SGD のテーマ

学生が SGD のテーマとして挙げたものの一部を列挙すると、次のようになる。「医療現場の現場、患者を思いやる気持ち、医療倫理ー勇気とは、病人と周囲の人たちの病気についての考え方の違い、患者と介護者の対比、我が家と病院、患者と家族と医療従事者、病気に立ち向かう、みんなの気持ち、自分らしさを生き通せ、前向きに生きる、患者との絆、患者の心情とまわりの支え、病気による自分と周囲の変化、青年期の病気による心理、障がい者への差別、障がい者と健常者のかかわり、見守る側は一体何ができるか、死を宣告されたら、誰もみな一人では生きていけない、Loveー絆、闘病記から考える医療体制、突然病にかかったら、がん末期患者の気持ち、応えてみせる！君の信念、難病と向き合う QOL、余命が決まった時どうするか、周囲の人間の大切さ、家族の愛・支え、支えてくれる人、前向きに生きるために一家族と医療従事者の協力、他」 これらのテーマには；生命の尊厳、医療の目的、信頼関係の確立やチームワーク、患者心理の理解、患者家族への配慮、医療体制の課題などを多々含んでおり、討議により見出されたテーマは学生の問題意識の表れとして見る事ができる。

総括的考察

車いす介助体験や高齢者体験、救急救命の実際を体験した後に闘病記を活用したグループ討議を施行することにより学生の問題意識が明確化され医療人としての自覚が高まり、疾患への関心が広がっていった。演習体験に加えて多様な「患者体験」を知り、患者の視点を学ぶことの多い闘病記を活用した本演習は、薬学導入教育としてその意義をみいだすことができる。

参考 1) ディベックス・ジャパン:健康と病の語りデータベース編・発行「患者の語り」が医療を変える 2007.11
 感謝：図書関連資料の作成は学生支援 GP コーディネーター中村忍さんに協力していただきました。附：本学情報センター「闘病記ライブラリー」は、平成 19, 20 年度文部科学省 学生支援 GP「人間知を高める相互交流プログラムの展開」の一部として新たに設置されたものです。